

第3章

本会議・サイト活動

ポートランド	32
ロサンゼルス	37
モンタナ	44
ボストン	55

ポートランド

7月28日～7月31日

サイトコーディネーター

高野恭平 竹内菜緒 Jessa Hutchins Bethany Marsh

ポートランドサイトスケジュール

- 7月28日(月) ポートランド到着
ジョイントオリエンテーション
日本領事館ウェルカムディナー
- 7月29日(火) 分科会活動
開会式
アラムナイディナー (リユニオン)
スキット上演
- 7月30日(水) ポートランドフォーラム
ゲストスピーカー Mr. Jim Tagawa
によるスピーチ
オレゴン日系博物館見学
- 7月31日(木) 分科会活動
JLPお好み焼きクッキング
スカベンジャーハント
スペシャルピックアップ
- 8月1日(金) LAサイトに出発
*宿泊場所：リードカレッジ

ポートランドサイト理念

ポートランド、1935年アメリカで初めて日米学生会議が開催されたこの土地から私たちの旅は始まる。ポートランドは雄大な山々と穏やかな気候に恵まれ、自然の豊かさと都市の機能性が調和する街として知られている。このような魅力あふれる街である一方、この土地は日米間の暗い歴史も刻んでいる。日本人収容所などの第二次世界大戦の遺産。現在では強固な同盟を持つ2国ではあるが、日本とアメリカはほんの60数年前までお互いに憎しみあっていた。この土地で私たちはポートランドの魅力を堪能しながら、日米関係の過去、現在、そして未来について再考させられることになるだろう。

ポートランドサイトの目指すもの

ポートランドとは一体どこにあるのか。知らな

かった参加者も少なからずいるだろうと思われるが、サイトの概要にあるように、この土地は西海岸に位置することから日本との関係が古くからあり、同時に日米学生会議にとっても、大変ゆかりがある土地である。第1回日米学生会議が開催されたあと、日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後日米両国で交互に開催されるようになった。第2回、第16回と開催されたその土地で、第60回日米学生会議においても最初のサイトとしておこなわれることになった。その土地で目指すものは、まず60回と続いている日米学生会議の歴史を辿り、会議の意義を再考すること。そして、その会議に参加する目的を改めてこの土地で考えること、である。

ポートランドサイトは、初めて出会う日本側参加者とアメリカ側参加者が打ち解けるためのアイスブレイキングと、出会ったばかりの参加者の友好を深めるための場でもある。日本文化の紹介と、参加者同士の交流を深めることを目的としてジャパデリ・リード・プロジェクト(JLP-Japadele Lead Project)と称した活動を行った。JLP活動では、日本側参加者が中心となり、アメリカ側参加者と日本の味「お好み焼き」クッキングを共同でおこない、参加者の交流を更に促進させる場を提供できたらと考えた。さらに、この土地では日米学生会議の60回を記念しての式典と称したリユニオンがおこなわれ、多くのアラムナイを招いての参加者間交流によって、日米学生会議の歴史を共に振り返り、現在開催する意義を考える場であってほしいという願いをこめて本サイトをコーディネートした。

7月28日(アメリカ時間) 日本側参加者到着

午前8時過ぎ、私たちを乗せた飛行機はポートランドの空港に到着した。入国手続きを済ませた後、

アメリカ側実行委員のAyaとJessaが出迎えてくれた。実行委員にとっては1年ぶりで感慨深い再会であり、参加者たちにとってはいよいよ本会議が始まると実感する瞬間であったろう。それぞれの思いが交錯する中、アメリカ側実行委員が手配してくれたバスに乗り込み、リードカレッジに向かった。お昼頃、到着した私たちを出迎えてくれたのはアメリカ側参加者たちであった。事前に連絡を取り合っていたが、会うのは初めてである参加者が多く、照れくさそうに挨拶を交わしながら、すぐに始まるジョイントオリエンテーションのために、それぞれが泊まる部屋まで案内され、荷物を置き、初めて参加者全員がロビーに集合した。初めての全体イベントであるオリエンテーションでは、実行委員の紹介、参加者の自己紹介、ギフト交換などを行った。その後は、分科会ごとに屋外でサンドウィッチを堪能した。その際、サプライズで日本側実行委員からアメリカ側実行委員へ実行委員ポロシャツが贈られた。夕方はポートランドの日本領事館へ招かれ、総領事から開会のご挨拶を賜った。

感動の対面▶



◀JECからのサプライズプレゼント

7月29日 アラムナイイベント、スキット上演

午前中は分科会の時間であった。これが初めて顔を合わせる時間で、事前に話し合ってきた分科会の方向性を話し合ったグループが多かった。午後から

は正装に着替え開会式を行った。JASCジャパンの天野会長と、ISC PresidentのMs. Robin Whiteより開会の挨拶を賜り、アラムナイの方々が日米学生会議に対する思いを紙に書きタイムカプセルを作った。その後、レストランでのディナーがあり、そこで伝統あるJASCソングを全員で合唱するなど、世代を超えた交流を行った。リードカレッジに戻ってからはスキットを披露しあった。



▲アラムナイの皆様

【参加者日記】

ポートランドの朝は、夏とは思えない寒さとピンとした空気に覆われます。今朝は分科会で朝食をとってから分科会タイム。初めてのアメドリとの分科会に少し緊張したけど、みんな社会への関心と問題意識をしっかりと持っていて、初回からストレートに意見をぶつけあうことができました！お昼にはopening ceremonyがあり、JASCの新しい旗のもとで、スピーチとタイムカプセルイベントが行われた。その後は全体で集合写真を撮り、レセプションランチ。夕方にはスキット練習。いよいよ今晚が本番！と気合を入れて練習してから、Portland Downtownの外れにあるレストランでalumni食事会に向かいました。日米学生会議の開催が今年で60回目ということで、還暦を祝い、JASCソングを熱唱♪REEDに帰ってきてからはスキット発表！笑い声と歓声で会場が沸き、一気にギリ間の距離が縮まる素敵な夜となりました。スキットに登場した全てのキャラは味があり、みんな本当に楽しそうに演

第3章 第60回日米学生会議概要

じていた☆スキットはyoutubeにアップされています！
(今矢涼子)



◀アメリカ側参加者によるスキット



仁平君の熱演が光る！▶

7月30日 ポートランドフォーラム

この日はポートランドフォーラムと称して、1日かけて移民問題に対する見識を深めるイベントを行った。午前中、8つのグループに分かれ、それぞれが別々の議題について議論した。午後からは一つの会場に集まり、各グループが議論した内容の発表、ゲストスピーカー Mr. Jim Tagawaによる講演などを行った。その後、ダウンタウンにあるオレゴン日系博物館を見学し、日系移民について勉強した。夕方からは、初めての自由時間が設けられ、参加者はそれぞれ買い物やダウンタウンでの夕食を済ませ、アメリカ側参加者に案内されながらポートランドの夜を満喫した。

班別のテーマとリーダー

GROUP 1: IMMIGRANTS ROLE IN CENTRAL GOV

リーダー：Colin Moreshead&田中豪

GROUP 2: IMMIGRANT LABOR

リーダー：Elizabeth Jones&廣瀬祥子

GROUP 3: ILLEGAL IMMIGRATION RESTRICTIONS

リーダー：Fausia Mahama&今矢涼子

GROUP 4: IMMIGRANT WOMEN IN SEX LABOR

リーダー：Rachael Staum&高畑乃枝

GROUP 5: AFFIRMATIVE ACTION

リーダー：Robert Cooper&後藤昌也

GROUP 6: SOLVING DISCRIMINATION

リーダー：Rebecca Norton&松尾恵輔

GROUP 7: COUNTERING ASSIMILATION

リーダー：Karen Jung&安川瑛美

GROUP 8: LANGUAGE BARRIERS

リーダー：Edward Philips&渡辺千尋



▲プレゼンテーションの様子

【参加者日記】

午前中は移民政策について、グループに分かれて議論し、簡単なプレゼンテーションを行った。午後は、オレゴンの日系移民博物館に行って、日系3世の白髪の紳士に話を伺った。高校時代に本で読んで、日系移民の苦難については知識としては知っていたものの、それを体験した人から直接話を聞くことは、全く違った意味があった。彼に、日米で戦争が始まった時どう思ったかを聞いた時のこと。彼は、“I was always loyal to the U.S.”と言ったのだ。その答えを聞いた時に軽い驚きがあった。そう言っている彼の外見が、いわゆる日本人と何ら変わらないからだろう。戦時中は、さぞかし苦労しただろうと実感させられた。しかし、彼はその二重性を楽しんでいるようでもあった。外見と中身のギャップがあることで、壁に直面するというのは、歴史上の話ではなく、今も存在する問題である。日本人とは何か、多様性をどうすれば社会が受容できるか、考えさせられた1日だった。
(大井あゆみ)

7月31日 JLP、スカベンジャーハント、リフレクション

午前中は分科会の時間であった。その後、JLPとしてお好み焼きパーティーを行った。おたふくソース株式会社様のご厚意により頂戴したお好み焼きの粉を使い、事前に作り方を勉強してきた日本側のリーダーが皆をまとめ丁寧に好み焼きの作り方や歴史を教えた。満足いくまで堪能した後は、スカベンジャーハントと称した一種のゲームを行った。これは事前に与えられた暗号混じりの指示書に従って写真を撮り集めていくもので、正確に意図を読み取れば自然に観光名所を回れるようになっている。夜はスペシャルトピックスの時間を設け、参加者が考えた議論してみたいトピックについて話した。食文化についてなどとても固い内容から恋愛に対する価値観についてなど様々なトピックが挙げられ、参加者たちは思い思いに議論を楽しんだ。

【参加者日記】

午前中に2回目の分科会で集中した議論をした後のこの日の昼食は、日本側参加者企画のお好み焼きパーティー。私たちは久しぶりの日本食とあって、日本からスーツケースに忍ばせておいたお好み焼き粉とソースを手にする気満々。日米で協力して焼き上げたお好み焼きの味は、アメリカ側にも好評だった。お腹がいっぱいになったら、外へ出よう！とい

お好み焼き作り▶



◀スカベンジャーハント

い天気の中、班対抗スカベンジャーハントに出発。公共の場所で歌ったり、木に登ったり、JASCの人文字を作ったり……。実行委員から出題された数々の課題を、Portlandのダウンタウンでビデオにおさめた。レクリエーションとはいえ、負けず嫌いなJASCの面々。1番を取るために、観光そっちのけで全力疾走していたのが印象的だった。これらのイベントを通して日米参加者の距離はぐっと縮まったように思う。Portland最後の夜は、寮のラウンジで、遅くまで語り合う姿が多く見られた。（小野 元）

8月1日 LAサイトへ向けて出発

長かったようで短かったポートランドサイトが終わりを迎え、第2サイトであるLAへの出発に向けて、朝6時に眠い目をこすりながら日本側参加者はロードカレッジを後にした。

サイトコーディネーター後記

高野恭平

このサイトの計画を練る際、私たち実行委員が大切にしたこと、それは参加者に日米学生会議のことを深く知ってもらうことだった。アメリカで初めて日米学生会議が開かれたこの土地で、約70年の時を経て第60回という記念すべき会議が開かれる。このような歴史のあるサイトの焦点を日米学生会議の理解に合わせることは必然であったのかもしれない。

1934年に日米学生会議が始まって以来、第二次世界大戦など多くの受難にあいながらも、相互理解という変わらない理念のもと今日まで続いてきた。しかし、世界情勢は当時からは想像もつかないほど大きく変化した。1930年代、日米は今日のような確固たる関係を築けておらず、日米学生会議を開催すること自体、とても意味のあるものであった。しかし、現在日米関係は良好な状態を保っており、アメリカの関心は日本から中国や新興国へと移っているなかで、日米学生会議はその存在意義を見直す必要性に迫られている。ポートランドサイトを通して、私たちは参加者たちにこの問題を考えてほしかった。そして、この思いは大いにサイトの予定に反映されて

第3章 第60回日米学生会議概要

いる。

現状を把握し、変えていくためには過去を知ることがとても大切である。ポートランドに滞在中、私たちは幾度も歴史を振り返る機会を得た。歴代参加者によるリユニオンイベントでは新旧の参加者たちが入り交じり、それぞれの日米学生会議に対する思いを語り合った。移民フォーラムでは、日系アメリカ人たちの話を通して、1900年頃から現在に至るまでの日米関係を日米両国の視点から振り返った。

残念ながら、今年の日米学生会議ではアメリカ側参加者の数が例年よりも少なかった。これは日米学生会議、ひいては日米関係の存在意義が薄まりつつある変化の表れであろう。私たちは早急に適切な処置を行わなければいけない。私を含めすべての参加者が、この問題を真摯に受け止め、何らかの行動を起こしたとき、はじめてこのサイトは成功であったと言える。今後の参加者たちの活躍に期待している。

竹内菜緒

1934年に始まった長い歴史のある日米学生会議。そのなかで、初めてのアメリカ開催であった第2回日米学生会議の旅はポートランドから始まった。そして今年、60回目を迎えた会議が開かれる最初のサイトとして、またポートランドが選ばれた。

その土地で会議を行うことにあたり、アラムナイの方々も築いてきた日米学生会議の歴史とその存続の意義を「再考」する場と位置付け、日米両国のサイトコーディネーターと「4人5脚」でポートランドサイトの企画を行ってきた。

実を言うと、最初から再考に焦点を当てていたわけではなかった。ポートランドサイトのコーディネーターとなって間もないころ、アラムナイの先輩方が「ポートランドでリユニオンをしよう」と話を持ちかけてきた。正直、最初は「私たちの会議なのだから、自分たちで一からプランを考えたい」という思いから、あまり乗り気になれなかった。しかし、実行委員活動を通して多くのアラムナイと話すうち、段々とその考えは変わったのだった。

各世代の参加者との交流によって、世代を超えた日米学生会議の意義を「再考」できる最も適した場が

リユニオンではないか、いつしか心からそう思うようになり、何よりもリユニオンを成功させようと思いに強く誓い、スケジュールを組んできた。結果的に、開会式ではアラムナイの皆様に参加していただき、また、ポートランドにある素敵なレストランでのディナーにも招待してくださり、アラムナイの皆様の助けのおかげでとても素敵な思い出を作れたと思う。ディナーの場で多くのアラムナイの方々も参加者が談笑する姿、世代を超えた参加者がJASCソングを合唱する姿は、74年続いた会議の絆の強さを感じさせるものであった。

ポートランドは本来、第1サイトとして「疲れ過ぎないサイト」にする方針であったが、結果的には本当に目まぐるしく多くの企画が存在したサイトになった。まだ全員の顔と名前が一致しない最初の日に領事館ディナーを設けたり、1日に必ず二つ以上の企画を盛り込んだりと、相当ハードなスケジュールにも関わらず、参加者は文句一つ言わずに「お疲れ様」と声を掛けてくれた。サイトが終わった後にももらった数多くの参加者からの手紙は私の宝物となっている。

最後に、JASCの大先輩である天野様、梅崎様、中瀬様、大嵩様、竹内様をはじめ、ご協力いただいた多くのアラムナイの皆様、日本からポートランドまで足を運んでくれた多くのアラムナイの皆様には心より御礼申し上げます。また、一緒にリユニオン企画をしてくれた武田君、59回から仲よしだった米国側実行委員のBethanyとJessa、そして1年間を通してサイトだけに留まらず最も一緒に仕事をして支えてくれた高野君に心から感謝の意を伝えたい。



▲ポートランドサイトコーディネーター

ロサンゼルス

8月1日～8月7日

サイトコーディネーター

武田尚樹 李 凌叡 Josh Schlachet Joshua Turner
Jenka Eusebio

ロサンゼルスサイトスケジュール

- 8月1日(金) ロサンゼルス到着
分科会活動
- 8月2日(土) マイノリティーフォーラム
- 8月3日(日) Beach Day
- 8月4日(月) メディアフォーラム
Hollywood見学
- 8月5日(火) 比較政治フォーラム
- 8月6日(水) Business Day
- 8月7日(木) Greenberg Traurig Law Firm訪問
総領事館レセプション
- 8月8日(金) モンタナサイトへ出発
*宿泊場所：カリフォルニア大学ロサンゼルス校

ロサンゼルスサイト理念

ロサンゼルスはアメリカで人口第2位の西海岸を代表する大都市である。西海岸最大の商業、金融拠点であるのと共に、アメリカ最大の貿易港であり、対アジア貿易における役割は巨大だ。ハリウッドに代表されるエンターテインメント産業が常に世界をリードする一方で、電子機器、宇宙産業、バイオ産業など様々な最先端技術の成長も著しい。また、ロサンゼルスは民族多様性で知られ、特定の人種が過半数を占めていない数少ない都市でもある。われわれ参加者は超大国アメリカの活気の根源に触れるとともに、その代表的理念である多様性を肌で感じる事となる。

8月1日 ロサンゼルス到着、分科会活動

【参加者日記】

今日は初の移動日。アメデリとの出会いの場所、ポートランドを発ち、飛行機でLAへ。アメデリとジャパデリは別々のフライトで移動するため、朝起きた時にアメデリはもう居なかった。初めての別れ。数時間後に再会するのだとわかっていても寂

しさで胸が痛かった。しかし、そんな寂しさもLAでアメデリの出迎えを受けた瞬間消え去った。やはりJASCはジャパデリ、アメデリと一緒に過ごす空間に織り成される物語なのだ。夕方からのRTはさすがに全員に疲れが見え、あまり生産的とはいかなかったが、その後のディナーで僕は復活した。UCLAのカフェテリアはリードカレッジよりも種類豊富でおいしい、と皆言っている。ここでまた更に、幸せJASC太りしてしまわないか心配だ。

(金光慶紘)

8月2日 全米日系人博物館訪問、マイノリティーフォーラム

【日時】2008年8月2日(土)

【会場】Japanese American National Museum
Aratani Hall

【テーマ】Illusion and Reality: Re-examining Minority Issues in Japan and America

【概要】

1. 主催者挨拶
2. Curtiss Takada Rooks教授、Victor Bascara教授、Edward B. Fowler教授からのスピーチとTeresa Williams-Leon教授のモデレーションによるパネルディスカッション
3. マイノリティー分科会からのプレゼンテーション
4. 日米学生会議参加者、松本秀也とRebecca Nortonからのスピーチ
5. レセプション

特定の人種が過半数を占めていない数少ない都市として知られるロサンゼルスにおいて、マイノリティー問題についての知識を深める場を提供することをサイトコーディネーター内で決めていた。

この日はJapan-America National Museumの協

第3章 第60回日米学生会議概要

力を得て、博物館内のツアーを提供していただき、またフォーラムにご協力していただいた。Rooks教授からは“On Being American: Our Ability to be Either And”というテーマのもと、アメリカ内での人種差別や大統領選での人種間の投票の動きなど、Bascara教授からは“Asian Pacific Americans and the American Century”と題し、アメリカの歴史内でのマイノリティーの動きについて、Fowler教授からは“Homogeneous Japan?”というテーマで、主に部落民などの日本国内でのマイノリティー問題についてお話をいただいた。その後、会場から質疑を受けて、教授と日米学生会議参加者内で活発な議論が行なわれた。

第二部に入り、今度は学生からのプレゼンテーションを行なった。マイノリティー分科会からはアフーマティブアクションの是非について、松本秀也からは部落民、Rebecca Nortonは自分の経験から個人的な視点で「マイノリティーであることはどういうことなのか」を発表してもらった。最後はレセプションにて、フォーラム参加者内でマイノリティーに対する意見交換が繰り広げられた。



▲日本側代表松本秀也



▲アメリカ側代表Rebecca Norton



▲マイノリティー分科会発表の様子

【参加者日記】

8月2日はJapan-America National Museumを訪れ、主に日米のMinority問題について学びました。午前中は、Museumの見学をし、日本人移民が差別を受けた話や、太平洋戦争時の日系人強制連行という悲劇の歴史を学びました。写真をはじめとする数多くの資料は印象的でした。昼には日本人街に行き、日本食を食べて日米の交流を深めました。日本人街は前年にねぶた祭りを行うなど日本文化を米国に伝える一端を担っています。午後は、Aratani Hallにて、Minority問題に関するForumを開きました。学生側から2名が代表して、部落差別といったMinority問題について発表しました。そして、3名の大学教授にMinority問題についてご講演いただき、より知見を深めることができました。この1日を通して、改めてMinority問題の難しさを痛感しました。(後藤昌也)



▲ガイドから説明を受ける参加者達

8月3日 ビーチデー

【参加者日記】

アメリカに来て初めての日は、ビーチで思いっきり羽を伸ばす日となった。午前中はSeal Beachでサーフィン教室。大半のJASCerにとってサーフィンは初体験とあって、初めは皆サーフボードに立つこともままならず波と悪戦苦闘。しかし約2時間のレッスンで巧みな波乗りを披露する人もちらほら現れ、参加者はすっかりサーフィンの魅力

に取りつかれたようであった。午後はHuntington Beachへ移動してのフリータイム。日曜日ということでビーチは大変な賑いであった。海で泳ぐ人ビーチバレーに興じる人、ショッピングを楽しむ人と、JASCer全員、アメリカのビーチを満喫したようであった。集合時間に集まった皆の顔はこの1日ですっかり黒くなっていた。慌ただしく過ぎたこの1週間の緊張をほぐし、また明日から始まるハードスケジュールに取り組む英気を十分に養えたと思う。またアメデリとの親睦を深める上でも最高の1日であった。(坂本朋美)

映画・テレビ業界が有名なロサンゼルスにおいてフィルムの中で映し出される〈日本〉を、アメリカでのヒットドラマ“Shogun”を通してディレクターのJerry Londonとともに検証した。

また第二部ではSeth Jacobowitz教授をお招きして、グローバリゼーションによってメディアがどのように変わっていったか、“City of Lost Souls”の中で日系人がどのように描かれているかなどのプレゼンテーションして頂いた。

フォーラム後は参加者各々でHollywoodへ行きフリータイムを堪能した。



◀サーファーズ



◀Shogunの監督
Jerry London氏と



ハンティントンビーチ▶
での一枚



ウォークオブフェイム▶

8月4日 メディアフォーラム、Hollywood見学

【日時】2008年8月4日(月)

【会場】University of California Los Angeles
Royce 314

【概要】

1. アメリカでのヒットドラマ“Shogun”のスクリーニング
2. “Shogun”ディレクター Jerry LondonとのQ&Aセッション
3. Seth Jacobowitz教授から“BRIC-a-Brac: Globalization and Genre in Miike Takahashi's City of Lost Souls”と題したプレゼンテーション。

8月5日 分科会フィールドトリップ、比較政治フォーラム

この日は午前:分科会、午後:会議全体でのフォーラム、夜:スペシャルトピックスという構成だ。

分科会フィールドトリップ

通常は教室の中で議論を繰り広げる分科会だが、有識者との交流ができるように、また滞在地の特徴を活かした生の体験ができるようにと、フィールドトリップの日を用意した。街で博物館を訪問したり、日本経済新聞のアメリカ支局の方々に講演をしていただいたり、あるいは分科会間で共同セッションをしたりと、各分科会は普段と一味違う経験をする事によって新たな方向性を見出したようだった。

第3章 第60回日米学生会議概要

比較政治フォーラム

午後は参加者主導の比較政治フォーラムである。フォーラムの趣旨は日米両国の政治を理解し、学生が政治主体の一員となって何に貢献できるかを探るものだ。UCLAのTamanoi教授から市民の政治参加に関するスピーチを頂いた後に、下記のグループに分かれて議論を進めた。各グループのテーマは各会議参加者リーダーが、事前に検討を重ねてできたものである。議論後、全員で再び集まり、インフォーマルな発表会と質疑応答を行った。ここでは主に市民の政治参加とそのモチベーション維持が全体を通して大きな議題となった。

班別のテーマとリーダー

※カッコ内はリーダーを示す

Group 1: Food Culture and Nationalism

(小野 元、Neal Akatsuka)

Group 2: How campaigns in the United States and Japan get swing votes

(大井あゆみ、仁平理斗、Jon-Michael Durkin)

Group 3: Health insurance, private or public?

(後藤昌也、Chien Lam)

Group 4: Why vote? - An exploration of political apathy

(竹内友理、Robert Cooper)

Group 5: Centralism and Autonomy

(盛島正人、Charity Yoro)

Group 6: US and Japan in International Organizations?

G8 Summit (横山雄一、Kayoko Hirata)

Group 7: Conservationists and the indigenous community

(油井英孝、Rebecca Norton)

Group 8: Gun Control (坂本朋美、Gregory Schuster)

スペシャルトピックス

スペシャルトピックスでは、人体の商業化、日本の将来、歴史問題といつもながら多様なトピックが出揃い、UCLAのキャンパスの中で議論する声が夜遅くまで響いていた。

8月6日 ビジネスデー

日米学生会議は各企業から支援を受けて成り立っており、また会議中のトピックでも企業を主体とした問題の解決策を議論している。何より、会議参加者の大半がその将来において企業に就職することになるのだから、ビジネスと日米学生会議の縁は切っても切れない。その一方で、学生目から見た企業はやはり遠い存在であることも否めない。そこでLAサイトではビジネスと学生の接点を作ろうと試みた。その結果がこのビジネスデーである。班別の会社訪問、会議全体での港訪問、そして最後にはホテル会場で社会人との交流という三部立てである。

ビジネスで世界を股にかける社会人の方々を目の当たりにして、心なしか参加者の顔つきも緊張感を帯びていた。皆それぞれの進路について思いを馳せ、そして人生の先輩たちにアドバイスを求めている。

【参加者日記】

いつものような真っ青でBrightな空とともに、1日の始まり。

今日はスーツを着てのBusiness Day。3つのグループに分かれ、それぞれ企業を訪問する。行き先はBall Corporation, So Cal Computer Recyclers, Stewart Filmscreen Corporation。私の行き場所は「缶」製作工場のBall Corporation。午後に全員で訪れたPort of Long Beach。有名な貿易港である。大量の缶と壮大な港との出会いのなかで印象的だったもの、‘責任と想いを持って働く人達の顔’。次の目的地に向かうバスの中。移動時間も充実させるJASCers。こんなに世界に多くの人がいるのに、こ



◀JASCアラムナイでもある
玉野井氏



発表の様子▶

の人たちと出会えたことに運命を感じる瞬間。夕食は、Torrance Marriott South Bay Hotelで多数のビジネスマンたちとともにした。そこで印象的だった二つの顔、‘ビジネスマン(働く人)’としての顔と‘一個人としての顔’。

心地よい夜とともに、今日1日も終わる。

(渡辺ともね)



▲卓越したスクリーン会社で



◀貿易センターの屋上から



▶ビジネスレセプションの様子

Greenberg Traurig Law Firmを訪問した。本法律事務所は著作権法をセールスポイントとしているが、極めて大規模な総合的な事務所で、グローバルに展開している。

法律事務所では日本語が堪能なNaoki Kawadaさんを始め、総計4人の方からお話を伺った。内容は、音楽の著作権からTVビジネス、そしてリゾート開発に基づく業務にまで及んだ。また、具体的な業務のみならず、法律事務所の全体的な仕組み、法律業界のこれからの動きもお話してくださった。3時間に亘る訪問の中、始終Kawadaさんが同時通訳をしてくださり、難解な法律用語でも日本人参加者は理解できたようだった。今回の訪問は、法律という一般的に敬遠しがちな分野にも参加者が触れ、そして同時通訳による会議の可能性を示唆した。

▶トップ弁護士の方々



◀講演に聞き入る参加者達

夜は一同でロサンゼルス領事館に向かう。Ihara領事は歓迎スピーチにおいて現地の日本人街について言及し、将来韓国人と提携する可能性を述べた。自己の文化を保存することと、他者を疎外しないことが共存に繋がるという領事の考察に、参加者一同は大きな感銘を覚えた。その後も会議参加者は領事館職員と交流を深め、国際的な現場で働くことの意味をより一層感じた。

8月7日 法律事務所訪問、領事館晩餐会

ハリウッドという大きな文化産業を擁しているLAでは、それに関連するビジネスも発展する。著作権を扱う法律事務所はまさにその良い例だろう。この日は、午前に分科会に分かれて議論し、昼から

第3章 第60回日米学生会議概要



▲総領事に感謝状を贈呈



◀総領事公邸の玄関で

【参加者日記】

午前中に分科会内で議論をした後、午後は全米有数のGreenberg Traurig弁護士事務所を訪問した。業界全体の説明を受けた後、リゾート開発や著作権など各専門の弁護士(相談すれば時給700ドル程度)からの講義があった。それを仕切る代表は日本人弁護士であり、米国の最前線で活躍する彼の姿に大きな刺激をうけながら事務所を後にし、夜はロサンゼルス日本総領事邸でのディナーパーティーを楽しんだ。(田中 豪 一部改)

8月8日 モンタナへ向けて出発

この日は恒例の早朝からの出発。4時半集合にも関わらず、参加者らは実行委員が朝食を配るのを傍から手伝い、水を運んでいた。会議を自分たちのものとして捉え、参加者としての主体性が垣間見えるひと時である。

会議も半分が過ぎたことになる。参加者は後半に向けての抱負を胸に、モンタナへと発つ。

【参加者日記】

月明かりに照らされながら、ジャパデリはUCLAを後にした。荷造りやお喋りですずっと起きていた人が多く、みんな眠そうな顔をしている。振り返ると、ジャパデリを見送り欠伸をしながら部屋へ帰って行くアメデリが見え、出発が早いジャパデリのために一緒に起きてくれていたのだと気付く。

夕方、ミズーラのホテルでアメデリと再会し沢山の“I missed you”とハグを交わしながら再び全員揃ったことにほっとしたが、その後すぐ2、3人ずつホームステイ先へ向かうことになった。JASCでは離れている間の時間が、私達の絆を更に強めているような気がする。

その夜私はミズーラの飛行場で誰かが呟いた言葉を思い出していた。『折り返し地点だね』。

JASCにいと、充実感と楽しさゆえについて、時間の流れを忘れてしまう。

「もう」2週間ではなく、「まだ」2週間—そう自分に言い聞かせながら、眠りについた。(竹内友理)

サイトコーディネーター後記

武田尚樹

第60回日米学生会議のサイトの中で一番の大都市であるロサンゼルスサイト。そんな中で参加者にはアメリカの政治、経済、文化について見識を深めてもらいたいと思った。しかし、ただ企業を訪問してレクチャーを聞いて勉強をすると言った単純なフィールドトリップだけでなく、なるべく参加者に、自ら考え問題意識をもってほしいと願った。

政治の面においては、マイノリティーフォーラムで分科会がプレゼンテーションを行ったり、比較政治フォーラムでは、グループに分かれてもらい、相互に発表をしてもらった。

経済の面では、ビジネスデーの企業訪問後、アメリカに支店のある日本の企業や日米学生会議を贊助する企業の方々をお招きし、レセプションを開催した。参加者が食事を忘れ、企業の方々に積極的に質問を投げかけ、学生の立場からの率直な意見を述べ

ていたのが印象的だった。第60回日米学生会議が掲げていた1つの理念であるアメリカでの社会発信だが、パネルディスカッションやプレゼンテーションという形では行われなかったものの、このように個人個人が交流することにより実現できたのではないかと思う。

ロサンゼルスサイトコーディネーターでミーティングを重ねるたび、そこで実現したいことが増えていったため、計画時、移動日を除いたロサンゼルスで過ごす6日間すべてのドレスコードがビジネスフォーマルとなってしまったことに気がついた。そこで、丸1日をビーチデーにすることにより、その日は大都市での企業訪問やフォーラムから離れ、その土地特有の文化に触れつつ、西海岸の太陽をたくさん浴びリフレッシュすることが出来た。

最終的に、忙しいはずのロサンゼルスサイトも交通手段など効率性を見直すことによりフリータイム

を十分確保することができた。LAサイトがアカデミックになり過ぎてしまうのではないかと懸念を抱いていたが、目的意識の高い参加者に救われ、上手くオンとオフの切り替えができた。この1週間で、参加者だけでなく会議外の方々から多くの刺激を享受できたのではないだろうか。

最後になったが、アカデミックな面でサポートしてくれた李、ユニークなアイデアで数々のイベントを立ち上げてくれたSchlachet、軍隊式で皆にしっかりと指示出しをしてくれたTurner、いつもサイト企画の相談に乗ってくれたJenkaに感謝の気持ちを述べたい。サイトをゼロから作ることは並々ならぬ努力を要したが、その中でも、1日1日と近づく本会議を想像しながらする皆とのミーティングはとても楽しかった。それぞれの努力が積み重なりあった結果の本番での達成感は一入だった。ありがとう。



▲LAサイトコーディネーターポーズ



▲仲良しECs大集合

モンタナ

8月8日～8月14日

サイトコーディネーター

廣田隆介 渡辺恭子 Aya Nakanishi Hidemi Tanaka

モンタナサイトスケジュール

- 8月 8日(金) ミズーラ着
 ホストファミリー対面式
- 8月 9日(土) ホームステイ
 Jeannette Rankin Peace Center
 キャンドルセレモニー
- 8月10日(日) ホームステイ
 Western Montana Fair
- 8月11日(月) 分科会活動
 Free Cycles Bike Building Workshop
- 8月12日(火) 戦争と平和コースフィールドトリップ
 環境コースフィールドトリップ
- 8月13日(水) 分科会活動
 Libby-Minamata上映会
 スペシャルトピックス
- 8月14日(木) 環境フォーラム
 ディナーレセプション
- 8月15日(金) ボストンサイトに出発
 *宿泊場所：Campus Inn、Holiday Inn Express

モンタナサイト理念

雄大な自然に囲まれ、時間の流れが緩やかなモンタナ。人々はアメリカ西部の古き良き伝統を受け継ぐ一方で、環境問題や平和活動に力を入れる革新的な土地でもある。当サイトでは大都市とは異なるアメリカの一面を、ホームステイや環境フォーラム、戦争と平和コースフィールドトリップなどを通じて参加者に体感してもらう。そして人が自然との共存を図るここモンタナから、アメリカの原点とこれからを見つめ、多様なアメリカ社会への理解を深める事を目的とする。

8月8日 ミズーラ着、ホストファミリー対面式

アメデリの飛行機が遅れ、ジャパデリが4時間ほど先の到着となり不安の幕開けであったが、分科会

の準備を始める者、不足する睡眠を補う者など、デリゲートが臨機応変に対応してくれたお陰で幸先の良いスタートとなった。アメデリの到着と共に待ち合わせ場所のDouble Tree Hotelに次々とホストファミリーが集まり、ミズーラ市長からのProclamationが読み上げられ、日米学生会議は正式にミズーラ市での約1週間の活動をスタートさせた。



▲日米学生会議週間開会宣言

8月9日 ホームステイ、Jeannette Rankin Peace Centerキャンドルセレモニー

午後に予定されていた運動会が悪天候により中止されたため、デリゲート達は思い思いにホストファミリーとの時間を過ごした。中にはハンティングや、登山、川下りに繰り出した者もあり、モンタナの大自然を満喫する良い機会となった。

夕方には有志でJeannette Rankin Peace Centerが主催する、平和の蠟燭行進に参加した。63年前に長崎に原爆が投下された日を国籍に関係無く噛み締め、平和への思いを新たにしました。



▲ミズーラ市が一望できるM山山頂からの眺望



◀バッファロー見学に出掛けた一行



ホストファミリーと▶乗馬体験



▲キャンドルセレモニーの様子

8月10日 ホームステイ、Montana Western Fair

午前中はホストファミリーとの最後の時間を過ごし、昼過ぎに日米デリゲートが再集合した。午後からはWestern Montana Fairに全員で繰り出し、移動遊園地やDemolition Derbyと呼ばれる自動車同士の破壊ショーなど、アメリカ中西部のワイルドな文化を体感することとなった。

【参加者日記】

午後は身支度を整えてモンタナフェアに向かう。オールドアメリカンの雰囲気漂う、小さな田舎の可愛い遊園地といったところであるが、流石は“アメリカ”、筆者を2時間激しい乗り物酔いで苦しめるなど実態はなかなかの強者揃いであった。園内でのダービー観戦の際には、日本ではみられないあの豪快さと、興奮して急に好戦的になった某アメデリに驚かされた。一日を通してモンタナの魅力を満喫し、JASCerとの絆を感じさせられる日であった。

(中村玲奈 一部改)

【ホームステイ感想】

「モンタナサイトで一番の思い出は？」

参加者のほとんどがこう答えるであろう。

「ホームステイ!!」

今回のホームステイは2泊3日。滞在先は直前まで秘密にされていた。私はどのデリとどのような家庭に滞在するのかとても楽しみであった。私はデリ2人とCharyn, Scottというカップルと犬6匹の家にステイさせていただいた。彼らは環境に対してとても熱心であった。それは生活のいたるところで垣間見ることができた。たとえば、ペットボトルは決して買わず、タンブラーを持ち歩く。道端のゴミを拾う。買い物では100%リサイクル素材の籠を持参。屋根にソーラー電池を設置。レストランの食べ残しは持ち帰るなど。私たちは本当の環境保全、エコフレンドリーな生活とはこういうことだと身をもって経験することができた。同時に私たちの環境に対する考え方は甘すぎると痛感した。

ステイ中企画されていた運動会が雨で中止になってしまったのは残念だったが、他にもたくさんのことを経験した。ポルシェで満天の星空の下をドライブ。大自然に囲まれてバルコニーでランチ。犬

第3章 第60回日米学生会議概要

たちと庭でフリスビー。(私は犬が苦手だったが)市場へ買い物。ハイキング。隣町の温泉。朝食に味つき昆布の卵焼きを作ったこと。

2泊3日と期間はとても短かったが、私たちJASCerはしばし会議のことを忘れ、ミズーラの大自然の中で生活している地元の方々と各々が有意義な時を共有した。その証拠に数日間、私たちはホームステイの話で持ちきりだった。

ホームステイ後も私たちの交流は続く。2人はホテルに遊びに来てくれ、Charynは環境フォーラムに参加してくれた。今でも彼らとたまにメールを交換している。このようにJASC中での出会いがこの先も続けばよいと思う。最後に、ECの皆、JASCerをととても温かく迎えてくださったミズーラの皆さん、ありがとうございました！(今度こそ運動会をしたいです。)

(渡邊千尋)



▲お世話になったホストファミリーと

8月11日 分科会活動、Free Cycles Bike Building Workshop

午前中は久々の分科会活動。ファイナルフォーラムが脳裏をチラつき、皆一様に分科会に対しての集中力が高まることで、意見の対立も先鋭化する。同時に会議も中盤に差し掛かり、疲れと睡眠不足で周りに対する配慮に欠け、ぶつかり合うことも増えてきた。そのような困難を乗り越えて行くことで、分科会としての団結力が高まっていった。

午後は一転変わって、リサイクル部品を使った自転車制作に取り組んだ。環境意識の高いミズーラ市

ならではの取り組みで、誰でも無料で自転車を作ることができ、それを支援するボランティアの方々も意欲満々で、出来上がった自転車は街の中で共有されているという。JASCerはそのような先進的な取り組みを学ぶと共に、純粹にモノ作りの楽しさを味わっていた。

【参加者日記】

8月11日、午前中はRT活動。Final Forumまで後1週間と迫っている事から各RTとも気分が入ってきていることが分かる。我がRTも最終的な方向性を決める議論をした。さすがにここまで来るとそれぞれの思い入れが交錯し、最初は前に進まなかったが何とかまとめる事が出来た。

午後からはworkshopで『Free Cycle Shop』という、廃棄された自転車を修理して使えるようにするイベントに参加した。多くの者が久しく持っていないであろうスパナやペンチをなれない手つきながらも扱う姿は、どこか懐かしいような新鮮なような感じがした。

友人と試行錯誤を繰り返し完成させた自転車は不恰好ではあったがちゃんと動き、それに乗って受けた風の心地よさと言ったら今まで体験した事の無い程に気持ち良かった。このworkshopを通してリサイクルの大切さへの意識、地元住民との楽しい交流ができ私は非常に満足して眠りについた。

(比嘉慎一郎)

8月12日 戦争と平和コース、環境コースフィールドトリップ

この日は2つのグループに分かれて、それぞれのテーマでフィールドトリップを行った。それぞれ最先端の場所はデリゲートの知的好奇心を刺激し、いつも以上に質問の手が挙がっていた。夜はダウンタウンでのフリータイムを設定していたが、皆自主的にホテルに残り、分科会の作業を進めていたことが印象的であった。

戦争と平和コース

引率担当：渡辺恭子 Hidemi Tanaka

1. Missoula Peace Park, Jeannette Rankin Peace Center, Fair Trade Store

Jeannette Rankinは全米で初めてアメリカ議会に選出された女性であり、そして、第一次世界大戦に参戦反対の票を果敢にも投じた人として知られている。彼女の意志を継ぎ活動に取り組むJeannette Rankin Peace Center (<http://www.jrpc.org/>)の方に案内してもらいながらMissoula Peace Parkを散策した。山の上にあるこの土地をPeace Centerとボランティアの人たちが協同し、自由に人々が集まり平和について語り合える場を作る取り組みを続けている。山の側面には、Missoulaの町から見えるように、と現在進行形で巨大なピースマークが石を使って形作られている。ここにやってきた人達は、山にある石をそこへ置いていくという。私達JASCerもそれぞれに石を手にとり、反戦を示す巨大なピースマークを形作る石を置いていった。その後は、Peace Centerに移動しセンターの理念や取り組みについて何うとともに、収益の一部として併設・運営されているFair Trade Storeも見学した。



▲ピースマークに石を置く参加者達

2. State Veteran's Memorial Rose Garden, Fort Missoula Rocky Mountain Museum of Military History

アメリカの軍事歴史について学ぶFort Missoula Rocky Mountain Museum of Military History (<http://www.fortmissoula.org/>)の方に案内をもらいながら、State Veteran's Memorial Rose Gardenを見て回った。そこには、大小様々の戦争

記念碑が建設されており、訪れる人々に過去命をかけて国のため、愛する者のために戦った者達がいることを思い出させる。その後は、Fort Missoula Rocky Mountain Museum of Military Historyに移動し、アメリカ開拓時代から、テロとの戦争、現在に至るまでのアメリカ軍事の歴史を展示した資料館を各自見学した。



▲ベトナム従軍兵士の像

3. War&Peace Forum

午後は、午前に訪問したJeannette Rankin Peace CenterとMilitary Museumの方々、そして第二次世界大戦も経験した退役軍人といった方々を交えてのフォーラムを開催した。まずは、4人のスピーカーの方々からそれぞれのテーマのもとスピーチをして頂いた。太平洋戦争での経験について、平和活動の重要性について、アメリカ軍の政策・使命・抱える



▲立場の違う皆が輪になって議論を重ねた

第3章 第60回日米学生会議概要

問題などについて4人の方々から伺い質疑応答を経て、その後1つの大きな円になり意見交換を行った。意見交換では、広島・長崎への原爆投下の目的は何だったのか、それは正しかったのかという事から、日本の憲法9条の意義を日本人はどう捉えているのかといったことまで議論が及び白熱した時間となった。

この討論の模様とインタビューが、You Tube上にアップされている。

<http://jp.youtube.com/watch?v=hsFr02s1VAM>

環境コース

引率担当：廣田隆介 Aya Nakanishi

1. Montana Technology Enterprise Center

モンタナ大学と共同で最先端の環境技術を研究しているMonTECを訪問し、レクチャーと施設見学を行った。レクチャーでは水素エネルギー、リニアモーター、バイオマスエネルギーなど代替燃料技術を学び、技術的にはそれらが確立されていることを再認識した。その後実際に太陽光発電、風力発電、そして水素エンジン車を見学し、それらが市のバックアップを得て市民にも広がっていることを聞き、ミズーラのような小さな自治体から環境活動を始めることの意義を感じた。

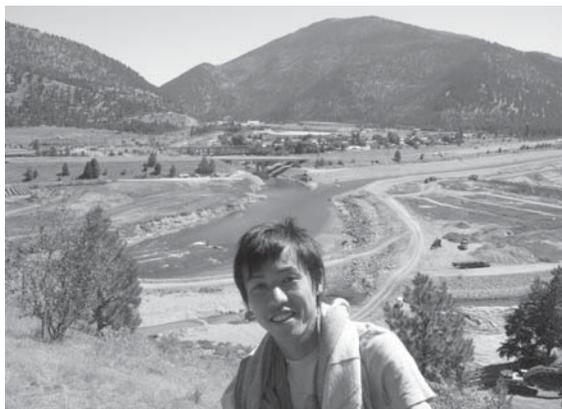


▲ソーラーパネルを見学するデリゲート達

2. Milltown Dam Superfund Site

100年程前の大洪水の影響で、鉱山廃棄物が蓄積されてしまったMilltown Dam。その汚染物質処理作業に当時鉱山開発をしていた一企業が裁判によつ

て全責任を認定され、現在でも汚染物質の除去がその企業によって行われている。企業が産業廃棄物を山林や空き地に廃棄し、言い逃れができてしまう日本との違いにショックを受け、日本でもこのような活動を広める術は無いかJASCer同士話し合った。



▲干上がったMilltown Damをバックに一枚

3. Smokejumper Center

人間の命、財産、そして野生動物やその土地の植生を破壊する山火事は、現在アメリカで社会問題になっている。その山火事専門の消防隊である、Smoke Jumper達の基地を訪問した。山火事に飛行機から飛び込み、延焼を防ぐ彼らは一見輝いて見えるが、その裏には高倍率の試験と過酷な訓練があることを聞かされた。更には近年温暖化や人工植林の影響で山火事は確実に増えており、デリゲート達は改めて環境問題の影響の大きさを実感した。



▲天井からぶら下がる消防士の装備品を見学中

【参加者日記】

今日は事前に選択した『環境コース』に参加した。(一方では『戦争・平和コース』が用意されていた。)水素燃料等の環境に配慮したエネルギーについて研究・開発を進める「Technology Enterprise Center」、地域と企業が一体となってダム解体を行う「Milltown Dam Superfund Site」、森林火災消火に立ち向かう「Smokejumper Center」を順に訪問。現地の環境問題に取り組む様子を実際目で見て学ぶ貴重な経験だ。1日にこれほどのフィールドトリップをし、色々な人と出会うことが出来る事に幸せを感じる。

特に印象的だったのは「Smokejumper Center」。消火活動の為に重い荷物を背負い、ヘリコプターから勇敢に火に立ち向かう人々の姿を想像すると、常に全力なJAScerの様に情熱的で心打たれるものがある。夜は皆と合流し、お互いの1日について語り合いながら眠りについた。(廣瀬祥子)

8月13日 分科会活動、Libby-Minamata上映会、スペシャルトピックス

【参加者日記】

会議中、最も長いRT time が設けられていた日だった。各RTは、近づいているファイナルフォーラムまであまり時間がないことを再認識し、予定を再調整し始めたような印象を受けた。計7時間のRT sessionを終えた後、夕方にはリビー市のアスベストの被害と水俣市の水俣病の被害を対比させたドキュメンタリーを鑑賞した。実際にアスベストの被害者を家族に持つ方、ドキュメンタリーを制作したジャーナリストの方等に来ていただいて行われたQ&Aでは、多くの質問が飛び交い、デリゲートの積極的な姿勢と問題意識の高さに刺激された。夜はバラエティーに富んだ内容が並んだ、デリゲートにより議論がリードされるスペシャルトピックの時間である。政治・文化・JASCの意義など多岐に渡るトピックから1つ選択し語りあった。これを機に今まであまり話す機会のなかったデリゲートとの距離が縮まった時間でもあった。(菅田有里)

8月14日 環境フォーラム、ディナーレセプション
環境フォーラム

【会場】 Missoula Children's Theatre

【テーマ】 Glocal Effect of Modernization

【概要】

1. 開会の辞 Mayor John Engen (9:00 ~ 9:45)
2. テーマ別グループディスカッション(9:45 ~ 12:30)
3. 基調講演 Prof. Steven Running(14:00 ~ 14:30)
4. パネルディスカッション(14:45 ~ 16:45)
パネリスト：Prof. Running、Ms. Gayla Benefield、Ms. Diana Hammer、金光慶紘
5. 閉会の辞 Maureen&Mike Mansfield Center Director Terry Weidner (16:45 ~ 17:00)
6. ディナーレセプション(17:30 ~ 20:00)

午前中は以下の9つのグループに分かれ、それぞれ設定されたテーマについて意見交換を行った。現地の活動家や市民の方も混じり、お互いの国の政策の違いや取り組みなども共有し学びあう事ができる良い機会であった。午後からはノーベル賞受賞者を含む3人の有識者と、日本側代表者である金光慶紘の4人で、Glocal(Global+Local) Effect of Modernizationというテーマに沿ってパネルディスカッションが行われた。閉会後にはホストファミリーを交えてのディナーレセプションを行い、モンタナでの最後の夜はお世話になった方々との別れを惜しみながら過ぎて行った。

班別のテーマとリーダー

※カッコ内はリーダーを示す

Group 1: Poverty and Environmental Disaster

(中村玲奈)

Group 2: Wildlife Conservation: Drilling for Oil in the Arctic National Wildlife Refuge

(李 鎮河)

Group 3: Coral Reefs: A Victim of Global Warming

(渡辺千尋)

Group 4: Environmental Politics: Reduction of Emission VS Respect for Economic Growth

(菅田有里)

Group 5: Sustainable Farming

(仁平理斗)

Group 6: Alternate Energies

(神馬光滋)

第3章 第60回日米学生会議概要

- Group 7: *Conservationists and the Indigenous Community*
(坂本朋美)
- Group 8: *E-waste*
(金光慶紘)
- Group 9: *Natural Disasters*
(松本秀也)



◀ディスカッション
リーダーの9人



グループ別ディスカッションの
様子▶

【環境フォーラムパネルディスカッションに参加して】

私は、8月14日に開催された環境フォーラムのパネルディスカッションに、パネリストとして参加した。この日は、モンタナサイトの最終日であり、このサイトの目玉と言ってよいイベントだ。パネリストはProf. Running (IPCCメンバー：2007年のノーベル平和賞共同受賞者)、Ms. Hammer (米環境保護局)、Ms. Benefield (リビーアスベスト被害者：活動家)そしてYoshihiro Kanemitsu (大学生：住所不定(当時))である。経験も知識も(住所も)ない自分が、パネリストに交ざって、何を発言できるのだろうと感じた。ディスカッションが始まると、やはり極度の緊張に襲われ、喉の渇きが止まらず、ずっと水を飲んでいたので覚えている。後で、他のJASCerに聞くと、緊張しているようには見えなかったそうだが・・・。前半の1時間では緊張のせいか、あまり思ったことが発言出来なかった。何より、パ

ネルの難しさは、質問に対してその場で即座に答えるということである。何とか回答したところで、その後すぐに、あれも、これも言えばよかったと後悔をした。冷静に落ち着いて考えてみれば、浮かんでくる言葉、アイデアもなかなか舞台上、スポットライトの下ではそうはいかないものだ痛感する。こんな状況を変えてくれたのが休憩時間の出来事だった。休憩時間になり、壇上から降りると、アメドリも、ジャパドリも、みんなが温かく迎えてくれて、励ましてくれた。その時私は、気づいたのだ。他のパネリストを真似て、背伸びしようとしなくても、この信頼出来る仲間の、学生の代弁者となった気分で、学生らしくやればよいのだと。後半からは、壇上で、独りで何とか答弁しようとしていた自分は、もういなかった。JASCerのみんなと一緒にパネルをやっているという気持ちが、自分を凄くリラックスさせてくれていた。また、みんなに助けられたと思った瞬間だった。

最後に：このフォーラムをリードしてくれたAya、そして、この機会を与えてくれたJASC、励ましてくれたJASCer
Thank you!
(金光慶紘)



▲パネルディスカッションの様子

【参加者日記】

この日はMissoula Children's Theatreにて、環境フォーラムが開催された。様々な環境問題に対す

る地域のコミュニティーの認識や対策について熱く話し合わせ、ディスカッション終了後は沢山のJASCerがパネリストに質問し、その環境問題に対する意識の高さが窺えた。

ミズーラ最終日となるこの日の夜、自然豊かなモンタナとの別れを惜しむように、多くのJASCerが、ホテル近くの山に登った。満天の星空の下仲間と語り合いながら、残された時間の短さに、皆一抹の寂しさを感じるのであった。(松尾恵輔 一部改)

8月15日 ポストンへ向けて出発

【参加者日記】

モンタナを去る日。この日は朝の出発であったが、寝ずに語るもの、最後のサイトへの移動に向けて荷造りをするもの、それぞれモンタナ最後の夜を過ごした。と同時に、3サイトを終え、疲れも見えていた。しかしながらJASCがあと1週間で終わってしまうことを思い、皆ラウンジで、部屋で、それぞれ時を過ごした。そういった意味でモンタナサイトは、私達にとって特別だった。日本の学生にとってはもちろん、ほとんどのアメリカ側参加者にとっても真新しい環境であったモンタナは、私のアメリカに対するイメージにも大きく影響を与え、アメリカ側参加者も口を揃えて「良い経験になった」と語っていた。フォーラムなどでは環境というグローバルな問題を、国を越えて取り組むことの意義や難しさを知ることが出来た。アメリカでの3週間の思い1夜を過ごした我々は、眠りに着きながらバスに揺られ、最後の目的地ポストンへと向かっていった。

(松本秀也)

サイトコーディネーター後記

廣田隆介

「モンタナってどこですか?」「何故モンタナに行くのですか?」説明会や財務活動などの際にモンタナについて説明すると、必ずと言って良い程このように聞き返された。思えばモンタナサイトコーディネーターに手を挙げたのは、59回会議で秋田サイトを一番楽しみ、モンタナに同じ匂いを感じ取ったからであった。そしてその直感は正しかった。やは

りJASCにとって一番必要な刺激であり社会発信の方法だったのは、現地の人や機関を含めたコミュニティとの深い関わりであった。そしてコミュニティとの距離はそのコミュニティが小さければ小さいほど縮まり易い。現にミズーラ市は人口8万人程度で、1時間もあれば街を一周でき、人々の繋がりは密接であった。JASCの存在は人から人へと知り渡り、市長を始めテレビ局、モンタナ大学、マンズフィールド財団、地元教会などからのサポートを得て、地元の方々と交えたイベントも多岐に渡った。その為JASCerは自分達の活動の影響が見え易く、一番JASCの意義を感じられたサイトだったのではないだろうか。今でもミズーラでの思い出話に花が咲くことが多いのは、その証であると勝手に解釈している。そしてこのように深い充実感と達成感を与えてくれる小さなコミュニティサイトに、これからもJASCの足跡を刻んで行って欲しい。

個人的には、JLP運動会プロジェクトで5月から本会議中まで共に念入りに準備を重ねてくれた伊藤、渡邊、田中に感謝の意を表したい。運動会は結局悪天候により中止になってしまったが、競技用に準備したCDはスキットやRTビデオなど思わぬ所で役に立ち、また興味を持ってくれたアメドリと個人的に騎馬戦などの競技を試したりもした。彼らの努力無しにはこれら本会議の旨味を増す副産物は生まれなかっただろう。そして最後に、ミズーラでJASCに関わっていただいた全ての人々、現地に出張までして企画してくれたHidemi、留学先のスベ



▲現地コーディネーターのクリスさんと

第3章 第60回日米学生会議概要

インから現地とコンタクトを取ってくれたAya、そして日本から拙い英語で共に頑張ったきょんに感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

渡辺恭子

モンタナという土地のことを知る人は少ない。私自身も実際想像もつかなかった、あるとしたらとんでもない田舎であるということから、ほのぼのした原風景のイメージくらいだった。もともと自然に囲まれて育ったものだから、サイトコーディネーターするならばそういう慣れ親しんだ自然の温かさが多い場所がいいと思い手を挙げた。実際はどうだったかという、期待以上の土地だった。まさに、"Think Globally, Act Locally"という言葉の意味を実感した土地であった。

ホームステイ・野外アクティビティ・モンタナフェアといった、アメリカならではの雄大な自然における文化体験は今でも現地の人との交流として深く思い出に残っている。その一方で環境問題への取り組み、平和活動、軍事資料館や戦争記念碑建設などコミュニティの人々が自発的に活動していることにとっても驚いた。地球環境や国のあり方、また、それらに対して一人の人として何か出来ることはないかと考え、懸命に行動し挑戦している人たちに多く出会った。“Find the true north together.” 戦争と平和コースのフォーラム講演で、Jeannette Rankin Peace CenterのDirectorであるBetsy Dagueさんに言われた言葉が印象深く残っている。誰も平和の創り方に対する答えがどこにあるかは分からないが、協同しともに答えをみつけようとする姿勢の大切さを再認識させられた。彼女のまっすぐな瞳、そして語りかける言葉は彼女の歩んできた道、信念を想起させる力強いものだった。

そして、これは余談だがもう一つ、モンタナは予想外のハプニングが多かったサイトでもあった。モンタナに向かうには予想もしなかったプロペラ機へ乗り込み、がたがた揺れる機体に皆おののく。しかし、そこはまさに旅は道連れ、仲間が傍に思うと自然と怖さも収まった。お世話になったホストファミリーへのお礼の意味も込めて運動会を企画

していたが残念ながら豪雨により中止。しかし中止連絡が行き渡った途端に、まるであの時の豪雨が嘘だったかのようにカラッと晴れて拍子ぬけ。結局運動会は中止のままだった。ミズーラで有名な山の側面に描かれた"M"の文字へのハイキング。しかし実は登山なみの大変さだということに登り始めて気付くが時既に遅し。そして極めつけは、ボストン行きのアメデリ飛行機のフライトキャンセル。2日もアメデリと離れ離れになることになった。モンタナ、やってくれるな。ほのぼのした原風景のイメージに加え、ただでは済ませてくれないモンタナというイメージもさらに加わった。

癒しの地であると同時に、私達に様々な問題提起・考えるきっかけを与えてくれたこの土地、そしてコミュニティの素晴らしい人々に心から感謝を申し上げたい。遠く離れた地においても、現状の問題を変えたい、行動を起こしたい、という志を持ち力強く生きている人が多くいること、そしてそういった人たちと出会い共感し励まされた。最後になりますが、サイト開催にあたりご支援くださった全ての方々へ厚くお礼申し上げます。

アメリカ側実行委員 Aya Nakanishi

Coordinating the week-long session in Missoula was the most challenging, yet also satisfying responsibility that I had as an EC. When I chose to manage the “rural site,” I had done so enthusiastically, wanting to recreate the wonderful memories of the likewise rustic Akita of JASC 59. Although I’d known that coordinating such a rural area would be difficult, I was unprepared for the confrontation with such a bleak reality; Missoula site had the lowest budget allowance and was without any established connections or alumni network to give us a direction. I remember the other ECs would joke about the Missoula predicament, holding the site to a different, lower standard than the three city-sites. Instead of feeling helpless, however, the lack of resources motivated me to work harder

to produce the best site possible, where delegates and the local community alike would learn from each other.

What is the best way to engage the community of Missoula? How can we interact with the local people? What is there that JASC can only do in a small town like Missoula? How can we make an impact? With the help of the other site coordinators, we worked hard to incorporate Missoula-specific issues and to really connect JASC to the local people. I am pleased to say that the delegates went above our expectations in building relationships with community members and actively participating in local events.

My personal project for the Missoula site was coordinating the Environmental Forum as the culminating event for the Missoula site. Although this project took months of planning and confirming of details, it is also my proudest accomplishment as site coordinator. Seeing community leaders congregate at the Missoula Children's Theater and engage in discussion with the delegates, I felt that JASC was fulfilling its purpose and living up to the mission statement. I would like to thank all of the group discussion leaders (Reina, Masato N., Yoshi, Tomomi, Oyuri, Jinha, Koji, Chihiro, Hideya) for their patience, diligence and for stepping up as true leaders at the forum; special thanks to Yoshi, who worked double-duty as a group leader and panelist. Lastly, thanks to my fellow site-coordinators.

アメリカ側実行委員 Hidemi Tanaka

It was the first time ever for JASC to visit the Garden City of Missoula. This fact worried us site coordinators. What events are we to plan? What is in Missoula? Where is Missoula? Such questions relayed as we struggled with ideas. However, such concerns quickly evaporated as we gradually discovered the countless possibilities

the Big Sky Country had to offer. Yes, the first JASC in Missoula signified a new difficult challenge, but it also implied that it was a rare privilege and an opportunity for our genuine creativity. When JASC visits Missoula again, and I am sure it will, I sincerely hope our precedent will spark fresh inspirations and creative ideas for the future Missoula site coordinators.

In Missoula, all activities and programs revolved around three major themes: academic discourse, environment, and community engagement. We wanted to offer events with a rich and balanced blend of these three themes. Not only did these themes make Missoula site successful, it made the site significant. That is, significant to both the delegation and to the people of Missoula. And it is for this very reason, I am proud of our achievements in Missoula.

Being a rural site, many events were modeled after the 59th JASC's Akita experience. Like Akita, we had a local festival, host family program, roundtable sessions, and a major forum. This year, however, we decided to focus heavily on community engagement to leave a larger and definite impact to both the local community and the delegation. The Host Family Program, the Free Cycles Bike Building Project, the War & Peace Forum, and the Environmental Forum were all specifically designed to impact and engage the local members.

Our host family experience at the 59th JASC was highly memorable, but it slightly bothered us that we were always receiving things and thanking them. To return their favor, we have invited all host families to join us at our public events including the Bike Building Project, the War & Peace Forum, and the Environmental Forum. We have also planned the Undoukai, a Japanese style sports day event (which was unfortunately canceled due to rain). This sports

day event aimed to bring the delegation and the host families together through Japanese cultural sports and games, and it surely would have been a unique experience that only JASC could offer. We also collaborated with the Jeannette Rankin Peace Center for a candlelight walk to commemorate the August 9th Nagasaki bombing. The Peace Center members were delighted with the record turnout, and we felt positively about contributing to the community building.

Our week in Missoula certainly had a heavy emphasis on the environment, but we wanted to do more than merely discuss and learn about environmental issues. The Bike Building Project was significant for two main reasons. First, we directly contributed to sustainable transportation by building over 30 bikes from recycled bicycle parts. Second, we interacted with the local volunteers and built friendships. The War&Peace Forum gathered local peace activists, war veterans, active servicemembers, military historians, host families, and JASC delegates under one roof, and was undoubtedly bound to produce sensitive and uncomfortable discussions. Yet, we proceeded because we strongly believed in the bold impact it would make. We hoped this to become a life-changing experience, whether that meant reinforcing one's own opinion, synthesizing one's own with another opinion, or being enlightened to new perspectives.

The Environmental Forum embodied all three themes, as it was academic, environmental, and community engaging. Local environment experts and host families attended the group and panel

discussions. As site coordinators, it was highly rewarding for us to observe people from various backgrounds actively engaged in constructive dialogue.

Lastly, On behalf of the 60th Japan-America Student Conference, I would like to express my deepest appreciation to all the individuals, host families, and organizations that generously supported our programs at Missoula. I would like to especially acknowledge and thank Terry Weidner and Christopher Marlow at the Maureen and Mike Mansfield Center, for the success of this site would not have been possible without their guidance, resource, and support.

It has been my greatest pleasure and honor to collaborate with my fellow site co-coordinators: Aya Nakanishi, Kyoko Watanabe, and Ryusuke Hirota. I would also like to thank Ashley Neeley Lam, Marie Kanke, and Hiroyuki Miyake for the advices and inspirations they have provided.

Thank you.



▲モンタナサイトコーディネーターの4人

ボストン

8月15日～8月20日

サイトコーディネーター

呉 宣咏 伊関之雄 Sam Scully Nancy Yang

ボストンサイトスケジュール

- 8月15日(金) ボストン着
 8月16日(土) 分科会活動
 8月17日(日) ボストン観光
 分科会活動
 Local Japanese students との交流会
 8月18日(月) ハーバード大学教授とのお茶会
 Government 訪問
 8月19日(火) ファイナルフォーラム
 新実行委員選挙
 8月20日(水) ボストン市内班別観光(水族館・科学博物館・美術館)
 タレントショー
 ファイナルリフレクション
 8月21日(木) 第60回日米学生会議閉幕
 ＊宿泊場所：Suffolk University

ボストンサイト理念

日米学生会議の発信力。これを問うた時に、アメリカで我々大学生の主張を根付かせるためには、ここボストンの他どこにもないであろう。そしてその拠点を米国、いや世界の最高学府のHarvard Universityで行なうことは、誰にとっても大変光栄なことである。

発信や学問的な色彩は、ボストンサイトの後半部分で強かったが、前半部分は少し状況が違っていた。前半部分はボストンでの文化、歴史、政治体制に重きをおいてサイト計画を行なった。分科会活動の「成果物」を発表する任務遂行の前に、ボストンでしか見られない物を集団で見学した。そこで感じ取った近代都市のイメージは、各参加者、各実行委員それぞれ違うであろう。

また、1776年の独立宣言から端を発したアメリカの行政システムを、ボストン市議会の各部局(ボストン市長事務所・公民権事務所・選挙事務所・市議会)

を見学することで学び取ることができたのではないか。

ボストンサイト初日、アメリカ側参加者と実行委員の到着が、フライトキャンセルにより遅延してしまうという事件があった。にもかかわらず、21日のファイナルフォーラムでは日米の学生が一致団結して、妥協あり、葛藤ありの中、分科会活動の成果を最高の形で発表することができた。これも綿密に分科会での議論をまとめ上げることができた環境を提供して下さった、Harvard Universityのライシャワー日本研究所とSuffolk Universityの温かいご支援のおかげである。この場を借りて御礼申し上げたい。

8月15日 ボストン着

モンタナでゆっくりとした時間の流れを満喫した後は、第60回日米学生会議のハイライトであるファイナルフォーラムが行われるボストンへの移動。モンタナを発ったのはまだ太陽ではなく月がみえていた朝だったが、ボストンに到着し長時間の移動で疲れ気味の私たちを迎えてくれたのは終わりのみえないボストンの雨模様だった。

ニューヨークの名所がセントラルパークだとしたら、ボストンの名所はボストンコモンズという公園である。その公園のすぐ近くにある Suffolk Universityの寮に到着。フライトのキャンセルで一緒に移動することができなかったアメリカ側参加者の居ない空間は、言葉にできない違和感があり、皆が感じていたであろうその感情は、いつもより静まっていた参加者の声からも、表情からも出ていた。参加者のみならず、サイトコーディネーターとしてもボストンに来たのは初めてだった私達は、夕飯の準備のためにまだなれないボストンの町を雨と共に走っていた。



▲ジャパデリのみの緊急ミーティング

8月16日 分科会活動@ハーバード大学

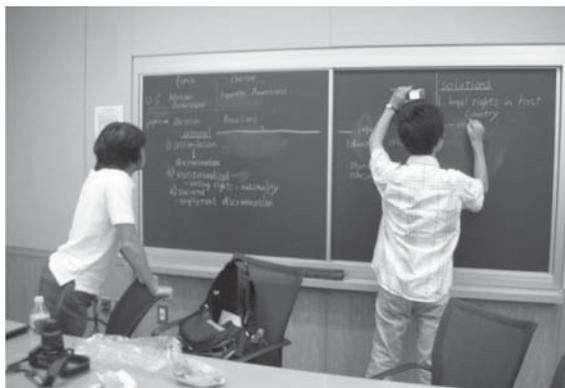
アメリカ側参加者がボストンに着く時間がやっと分かった喜びと共に、ボストン2日目の朝がやってきた。ボストンサイトのスケジュールには大分変更があったが、ファイナルフォーラムに向けての準備の時間だけは無くすことはできなかった。そのため、日本側参加者だけでハーバード大学にて分科会活動を行うことにした。モンタナサイトで分科会の時間を多く設け、ある程度お互いの意見を詰めていたので、日本側参加者だけの作業もそこまで難しくはなかった。そして、シアトル空港で待機していたアメリカ側参加者との連絡がインターネットを通じてできるようになり、チャットや電話を同時に行いながら日米参加者は臨機応変にネットミーティングを行っていた。分科会によっては、休憩時間を利用してハーバード大学のキャンパスツアーをしたり、分科会メンバーで大学の近くに夕食を取りに行ったりして、ハーバードの雰囲気を楽しみながら分科会メンバー同士の友情を更に深める時間にもなった。

【参加者日記】

前日の飛行機トラブルのためアメデリ不在で迎えたボストン2日目。当初のスケジュールは大幅に変更され、ジャパデリのみで終日RT活動を行った。Harvard大学に到着後、ディスカッション、映像作成、パワーポイント作成など、ファイナルフォーラムに向けてRTごとに最後の追い込みを開始した。私の所属するCSR RTは、スクリプトを作成する

一方で、シアトルに居るCSRアメデリメンバーとSkypeミーティングを行った。ファイナルフォーラム直前のトラブルによる不安をかき消すようお互いジョークを飛ばしあった。

深夜3時にRT活動を切り上げ、HarvardやMITの日本人留学生とのレセプションのスピーチに取り掛かると、別のイベントでスピーチが予定されていた実行委員の竹内がやってきて、一緒にスピーチを書き始めた。2時間後、真白なスクリーンを前に口を開けて寝ていた竹内を写真に収め、落書きしようか迷いながら、朝を迎えた。(盛島正人)



▲マイノリティ分科会の様子

8月17日 ボストン観光、分科会活動、Local Japanese students との交流会

早朝にボストンに着いたアメリカ側参加者には午後からの分科会活動に備えて休憩してもらい、その間日本側参加者だけでボストン市内観光を行った。Trolleyと呼ばれるバスに乗り、いくつかのコースの中で止まりたいところに降りて観光をするという自由観光コースであった。その中でボストンハーバーに行きつづけた海に魅了されていた人もいた反面、MITやボストン大学など名門大学の雰囲気に圧倒され、学問へのモチベーションが上がったという人も多かった。午前中の観光で元気を貰った日本側参加者は、午後からはアメリカ側参加者と合流し、ファイナルフォーラムに向けての準備に本格的に取り組んでいた。2日の空白時間があたたかさも無かったかのように話がスムーズに進んでいて、これまで

の友情がより輝いた瞬間であった。夜にはハーバード大学院やMITに在学中の日本人学生、そしてSTeLAという学生団体の実行委員を招き、彼らの話を聞き、お互い学び合う時間を持った。スピーカーがユーモアを交えながらアメリカでの大学院生生活をお話してくれたおかげで、日本側参加者もアメリカ側参加者もリラックスした雰囲気での質問することができた。違う空間で勉強している彼らとJASCerだったが、胸の中で燃えている情熱というのは同じなのだろうと感じた。

【参加者日記】

ジャパデリにはボストン3日目、アメデリには1日目。前の晩から到着が待ち遠しくて皆心待ちにしていたアメデリが早朝に到着。シアトルからの長旅から彼らが体を休ませている午前中に、私たちジャパデリはボストンをTrolleys busで観光。美しい街の景観と、涼しい風が心地良いうとうとしてします。バスガイドさんの街案内の名文句は「MIT = Millionaire In Training」。

午後には、全員でハーバード大学へ移動しファイナルフォーラムの最終段階準備に取り掛かる。夕方には、参加者の盛島君が携わって実現したHarvard、MITの日本人学生との交流会である。Science and Technology Leadership Association (STeLA)などで活動されている大学院生との貴重な交流ができた。その後は寮に帰って、寝る間も惜しんで各々RTに没頭するのだった。(安川瑛美)



▲コーディネーター盛島君の開会の辞

8月18日 ハーバード大学教授とのお茶会、 Government 訪問

せっかく世界最高の名門、ハーバード大学までできて教授と会えないというのはとてももったいないということでずっと前から力を入れていたイベント、ハーバード大学教授とのお茶会。ハーバード大学で教えている様々な専攻の教授を招き、少人数のグループに分かれて、普段だったらなかなか会えないハーバード大学の教授のお金では買えない話を聞ける貴重な時間であった。

日米学生会議の参加者の中には両国の政治に興味を持っている人が多い。百聞は一見にしかず。両国政治の違いを知るとい目標を持って、参加者は4つのチーム(ボストン市長事務所、ボストン市会議、市民権利事務所、選挙事務所)に分かれ、政府機関にそれぞれ訪問したのである。

教授を囲んで▶



◀ボストン市議会訪問

【参加者日記】

前日の夜はFinal Forumの準備が忙しく、寝不足であったが、朝のハーバード大学教授とのお茶会では、教授の話の面白さで目が覚める思いをした。様々な分野の研究をしている教授の中から、お茶したい人を選ぶのだが、私は、日本の伝統文学を研究している教授を選び、西洋から見た日本の伝統文学について話を聞き、「源氏物語」の愛の表現の仕方など、

第3章 第60回日米学生会議概要

知的好奇心を刺激する話を多く聞いた。その後では、レセプションが開かれ、話の聞けなかった教授からも、話を聞くことが出来た。

昼からは、Government Tripで、アメリカの政治に関わる機関を訪れて、アメリカと日本の政府に関するオペレーションの違いを学んだ。やはり、アメリカでは連邦制・選挙などの日本と違う点が多く見られるので、それに関連する機構の違いも多く見られることが実感された。

そして、夕方からは明日に迫ったFinal Forumの準備で、皆、深夜3時頃まで準備を行っていた。

(油井英孝)



◀前夜の決起集会

8月19日 ファイナルフォーラム、新実行委員選挙 ファイナルフォーラム

【会場】Harvard University Center for Government and International Studies South Tsai Auditorium

【プログラム概要】

1. Final Forum開催概要 武田尚樹 第60回日米学生会議日本側実行委員長(10:30～)
2. 開会の辞 ギルマン博士 ライシャワー日本研究所所長(10:35～)
参加者による60回各サイト説明 Ji Eun "Karen" Jung、Gregory Schuster、金光慶紘、油井英孝(10:45～)
3. 基調講演 エズラ・ヴォーゲル ハーバード大学名誉教授(11:00～)
4. 各分科会成果発表(11:45～12:45)
5. 閉会の辞 Sam Scully 第60回日米学生会議アメリカ側実行委員長(12:55～)
6. レセプション(13:00～)



◀ライシャワーセンターへ
クリスタルボール贈呈



▶ヴォーゲル
ハーバード大学名誉教授



◀サイト説明の様子

【参加者日記】

ついに、Final Forum、RT、そしてJASCの成果を発表する時が来た。“Japan as No.1”の著者として知られるEzra F. Vogel教授の基調講演を伺った後、参加者からの各サイト説明と、各RTの発表があった。RT活動の集大成である発表は、内容形式共に様々だったがしっかりと時間をかけて準備されたのが分かるユニークなものばかりだった。目を潤ませつつレセプションで談笑する皆の胸にあったのは、フォーラムを無事終えた達成感と、少しばかりの寂しさであった。(横山雄一)

今日はファイナルフォーラム。どの分科会も2日間、寝ずにこの日に備えてきた。朝ファイナルフォーラムに向けて集合した時に皆の顔を見た。連日の徹夜により疲弊していたが、若者特有の清々しい希望に満ちた目を見た。ちょうど1年前の今日に決まっ

た分科会のテーマは、この1ヵ月間日米の学生により議論され、空中分解することなく、様々な手法により社会に向けて発信された。特に映像を制作した分科会が多く、今後の社会発信に活用できる素材が多く制作された。反省点も残されたと思うが、世界で一番熱い私たちの夏のフィナーレは未来へと繋がるはずだ。(高畑乃枝)

新実行委員選挙

この伝統ある日米学生会議の継続を支えているのは参加者である。60回目が実現したのは、毎年パッションとやる気を持った参加者が立候補し、来年の本会議を企画したいと名乗りを上げるからである。

【参加者日記】

日米学生会議参加者には、ファイナルフォーラムに加え、本会議の最後に果たさなければならない大きな務めがある。次期実行委員の選出である。立候補者はそれぞれ特徴あるスピーチを行ったが、どのスピーチからもJASCに対する熱い気持ちを確かに感じることができた。選挙結果発表後には、新実行委員は次期日米学生会議について話し合い、他の参加者は外出したり、語り合ったり、翌日のタレントショーの準備をするなどして、残された時間を様々な噛み締めていた。(横山雄一)

未来といえば、今日は第61回実行委員選挙の日でもある。選挙には立候補しなかった私であるが、立候補者のスピーチを聴き涙してしまった。60回続いたこの素晴らしい会議を継続させていく、新しい16人の実行委員の勇気にエールを送りたい。そして、それぞれのJASCは今日から始まるのだ。

(高畑乃枝)

【ファイナルフォーラム後のアメリカ側参加者Rachel Staumによる本会議全体感想スピーチ(一部略)】

When I first came, I didn't know what to expect from JASC. When people asked what I was going to do over the summer and why, I had trouble explaining because I knew so little about the conference. Now, when I return home, I think I'll

have the same problem all over again. How can I explain what I did at JASC when so much has happened and so much has changed?

Throughout JASC, we've all been discussing what our purpose is in coming here. I think we feel a heavy responsibility in part because we were chosen to come here, which we know is an honor and a privilege and in part because we cannot help but feel the importance of JASC. After a month-long conference, after traveling across the continent, after meeting so many distinguished people, after studying so hard, we want to be able to say that we took this opportunity and made absolutely the most we could make out of it.

I know we all want to change the world, and we should. The world needs changing. But when I look out and see all of your faces, I have no doubt that I am looking at the politicians, diplomats, CEOs, journalists, and teachers who will change the world. At the same time, I'm looking at 63 people who make me laugh, make me think, and inspire me. Maybe the real purpose of JASC was bringing us together.

Throughout these four weeks we've spent together, I've changed and I've seen you all change. Our first business formal occasion at the Portland consulate general was the first time I'd ever worn a suit! At first we were all so nervous about mingling with the guests. I remember that it took five of us in a group to get up the courage to approach the first guest. Seeing how natural everyone was speaking to our guests at Boston site reminded me of how far we've all come. Today's final forum presentations are also proof of our intellectual growth.

I know that in a few days JASCers will scatter around the globe again, some of us returning to our colleges, some of us studying abroad, some of us entering the working world. Even for the few of us who become ECs, this experience can never

第3章 第60回日米学生会議概要

again be repeated; the 60th JASC was our JASC, our chance to grow and change and come to know each other.

Still, I know that the 60th JASC doesn't end here. I've already heard people planning reunions in Tokyo and visits all over the globe, and thanks to the internet even those of us who live on opposite sides of the earth can talk to each other. After being one another's roommates, colleagues, friends, and, in a strange way, family for four weeks, I know that something as simple as distance won't weaken our bonds.

In sixty years, I want to see you all again, standing under the arch at Reed College, celebrating the 120th JASC. The world will change and JASC will change, but still I imagine us all there with our canes and our hearing aids, celebrating sixty more years of JASC and sixty years of friendship.

8月20日 ボストン市班別観光(水族館・科学博物館・美術館)、タレントショー

今までファイナルフォーラムのための分科会活動の作業が手一杯で、外に出て思い切りボストン市内を堪能する時間を取ることが中々できなかった。



◀ボストン市内観光の一幕



▶夕暮れのボストン commonsで

天気は晴天、温かい日差しも照りつける。いざ楽しむ時となると、参加者・実行委員はただちに「観光モード」に切り替え、残り少なくなってきた時間を最大限に楽しんだ。

各自夕食を取り終えた後は、全員で集合して新実行委員による来年度の会議概要の発表を聞いた。今まで参加者だった16人の顔が実行委員らしく変化しているのを見て、非常に頼もしく思えたのだった。



▲第61回日米学生会議実行委員会

その後、お待ちかねのタレントショーを行った。出会って1ヵ月の中で、自分の内に秘めている才能を未だ隠し持っている参加者・実行委員は多い。中には、意外な才能を披露してくれる人もいれば、想像通りの出し物を披露してくれたり、写真を組み合

▶様々な個性が光る▶



◀日米ラッパーの
コラボレーション

わせて作成したビデオで本会議の思い出を投影したりと、非常に個性があふれる時間であった。

お楽しみから一転、「ファイナルリフレクション」に移る。自分一人、皆の前に立ち、最後のスピーチをすることができるチャンスなのである。例年通り、この場は非常に感情的になってしまう。感謝の言葉や仲間と離れる寂しさの共有、そして素直に自分の気持ちを言葉に表す人もいた。一人一人がこの会議に対して抱く思いを、生の声で聞く事ができた。

サイトコーディネーター後記

伊関之雄

この場を借りて、まずはボストンで我々の学生会議のために様々な施設の提供をしてくださったSuffolk University並びにHarvard Universityに感謝の意を表したい。インターネットを通したりサーチも宿泊した寮にて簡単に使用ができ、ファイナルフォーラムに使用したオーディトリウム無しには各分科会の成果の発表は大変難しかったであろう。最高の環境での最高の偉業を成し遂げることができた、と感じている。

このサイトは、度肝を抜かれるような事態から始まった。Missoula空港とSeattle空港で、アメリカ側参加者と実行委員が2日間足止め状態となってしまったのだ。ファイナルフォーラムまで残り数日しかない状況のなかで、どのようにして分科会の議論を行えば良いのか。果たしていつアメリカ側は到着するのか。このような不安と絶望感が生じてしまった。日本側実行委員とアメリカ側実行委員との綿密な打ち合わせを携帯電話で行ない、インターネットを双方で自由に使える環境にあったことから、メールやオンラインミーティングを利用して議論を続けることができた。当日は、実行委員として多少混乱状態になっていたが、今振り返ると臨機応変に物事を対処する力を身につける良い機会になったと自負している。

日本側のみでBoston市内を移動している際は、初めて観光に来た際の京都の四条河原町の地下鉄や町中をさまよっているような感じであった。宿泊場所がBoston市内のど真ん中に位置していたために、

多人種多文化を肌で感じ取れる場所に我々はいた。今までの各サイトで感じ取った様々な「アメリカ」にさらに、「都会」「映画で出てきそうな町並み」といったスパイスが混じった最終サイトになったのではないかな。

とりわけ、最終サイトはファイナルフォーラムに向けて準備などでストレスが自然に溜まってしまい、睡眠時間も少なく、体力的にも厳しい時間が多々あったであろう。しかし、「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」の理念の元に、各参加者は学生の立場として自分たちの主体的な言動が社会に発信されるように辛抱強く議論を続けた。各分科会の発表が終了した後の各参加者・実行委員の顔に滲み出た満面の笑みはそれを物語っている。

最後に、何度も記しているようにHarvard UniversityとSuffolk Universityの厚いご支援に感謝したい。両校の厚いサポートなしでは、各分科会の入念に準備してきた成果を最高の状態で発表することはできなかったであろう。そして計画が度重なる不意打ちでスムーズに進まなかった時でも、絶えず笑顔を保ち、楽しむ気持ちを持ち続けてくれた各参加者・実行委員に感謝したい。

呉 宣咏

4カ所のサイトの中で一番最後のサイトになるボストンは、会議の幕が下りる所でもあり、参加者のみんなが涙を流しながら再会を望む場所でもあり、個人的に2年間の日米学生会議の活動が公式的に終わる所でもある。一緒にコーディネーターをした伊関之雄は第59回日米学生会議に受かって、最初に参加した春合宿で初めて話かけてくれたJASCerである。私にとってボストンサイトコーディネートは日米学生会議の始まりと終わりがよく混ざっていて、今まで味わったことのない味をしていた。ボストンにはそれまで1回も行ったことが無かったので、こういったプランニングをすれば良いのかがよく分からなかった。周りのボストンに留学経験がある友達に話を聞いたり、ネットで検索したりしていたが、それらをしているうちにボストンに初めていく人だからこそボストンサイトに期待することを活かした方

第3章 第60回日米学生会議概要

が、JEC（日本側実行委員）としてできることではないかと考え始めた。2人のアメリカ側実行委員がボストンで勉強をしていたため、そうしたほうがお互いのニーズを当てはめることになり、プランニングもうまく進むようになった。

4人が話しあいながらプランニングしたボストンサイトだったが、実際最初にボストンに着いたのは日本側参加者だけだった。ボストンサイトのコーディネーターであった日本側実行委員はたった2人。2人ともボストンが初めてで、到着時にはすでに辺りは暗くなっていた。まるで日米学生会議の中で更にボストン学生会議が始まったようだった。しかし、ゼロから全部日本側実行委員サイトコーディネーター2人で引っ張っていかねばならなかったボストンでの最初2日間は、私の中では一番充実した時間だったかもしれない。アメリカ側実行委員に頼らないで、自分達で考え、判断し、みんなをリードしたその2日間を終えて、アメリカ側参加者が来てから本格的なボストンサイトが始まった。1年をかけて計画したスケジュールに大きな変更が出てしまい、毎日夜2～3時までのミーティングやスケジュールの調整を行っていた。準備したスケジュール通りにできなくなったことはとても悔しかった

が、肩を叩きながら笑ってくれたボストンサイトコーディネーター達のおかげでボストンでの日々は1日が1分のように感じるほど早く過ぎていった。本当に早かった。今振り返ってみると、パノラマのようにFacebookに載っている多くの写真と私の頭に残っているメモリがオーバーラッピングされ、ボストンへのノスタルジアを呼び起こしてしまう。またの機会でボストンに行くことになったら、私は間違いなくJASCerを探すでしょう。すぐ現実に戻って、日米学生会議はもう終わったと自分に言い返すでしょう。しかし、雨が降っていたあの夜、伊関と2人でボストンを走り回ったことや、クラブの音でうるさくて夜遅くまで眠れなかった日々、分科会メンバー達と熱い議論を行った後ハーバード大学の近くで食べたランダムな日本料理、目を擦りながら語り合ったラウンジなど、全ての思い出はそのまま心の奥に生きていて終わらないその話をしてくれるでしょう。私の生きていく原動力のたくさんの思い出を作ってくれた第60回日米学生会議のボストンコーディネーター伊関、Nancy、Sam、そして62名の参加者や参加者以外の全てのイベントに関わっていたみんなに感謝の気持ちを伝えたい。これからもよろしく、そしてお忘れなく。



▲ボストンコーディネーターの2人



▲1ヵ月共に頑張ったECs